上げられる。そのおかげで、いいこと たときにはカードを一枚相手に取り ばを話す生徒が多くなり、中学校に にわるいことば(=方言)をつかっ を書いたカードを持たされ、会話中 を話そうという目的で、自分の名前 年生のとき、いいことば(=標準語) 叔母からこんな話を聞いた。小学6 人ったとき、先生から褒められた、 すことは恥ずかし ていた。方言で話 封じ込めて暮らし いことだと思って 齢七十を超えた 若い頃、方言を 災から7年目にあたり東京・銀座の うな慣習はなかったが、いい、わる の子ども時代の思い出に触れ、 ら」という題で話したのだが、自分 地の声を聴く―本づくりの現場か 教文館で講演する機会があった。「大 ようになった。 かしいと思う心が恥ずかしいと思う の頃からか、方言で話すことを恥ず いなかった気がする。しかし、いつ い、の物差しは消えて無くなっては 2018年3月11日、東日本大震 母のおなかで聴いたことば き、半世紀の時を超えて、生々しい の甘美な甘え、のようなものが間欠 あふれ嗚咽した。会場に来られてい ない。母のおなかのなかで聴き、生 ばだ。そのことばにいいもわるいも 言というのは、この世に生まれ出る 泉のように噴き出した。思えば、方 寂しさ、不安、恐怖心、それと真逆 た方も驚いたようだが、いちばん驚 前から、母の胎のなかで聴いたこと いたのは私だったかもしれない。 「とじぇねわらし」を口にしたと 感じ、たいせつに育んで暮らしたい。 さこのうえない鰰にならない。人間 だのでは、雪とともにやってくる、焼 踏み台にし、いつしかそこから離れ 到る処青山ありというけれど、根を るさとを忘れぬように、ことばのふ いても、煮ても、寿司にしても、美味 daと入れた。 鰰をハタハタと読ん は、書名の下にあえてhadaha まわれて在る。 い。体の奥の奥、こころの奥底にし るさとである方言を忘れることはな かって大人びて暮らしていても、ふ るようになり、標準的なことばをつ の。 11月上梓した私の第二詩集『鰰 方言は、いわば根っこのようなも (出版社「春風社」代表、井川町

私の小学校時代、さすがにそのよ た」と口にしたとき、不意に、涙が

取り巻いていたのが方言だ。それを

出身、横浜市住

まれてからも、空気のように自分を

だしはとじぇねわらしでありまし